

かに小林惇委員長の下で、総科の一般教育の実態や様々な問題を知ることができ、その後の将来計画委員やコース委員の時に役立った。多くの委員会に加わったが、理工系の先生のモノの考え方や、総科に対する情熱を知ることができて、非常に勉強になった。

総科の初期には面白い学生が多かった。“総科”とは何ぞや、“地域”とは何ぞや、ということをよく考えていた。私など、専攻の日本近世史の分野で、藤田五郎氏の“一つの村の歴史にも世界史の発展法則が貫徹している”という名言を観念的に理解して、専門の儒学史のほか、日常的に地域研究をやっていると、3回生のR君に、地域研究とはこういうものであるべきだ、と夜を徹していじめられたこともある。後藤先生からは「総科が近世瀬戸内海地域研究の拠点になるように頑張ってほしい。」と言われ、それだけでも大変なことだと思っていただけに、学生にヤラれたことはショックだった。

研究面では、境界領域の研究、学際的な研究、教育面では、専門教育と一般教育の一体化による一般教育の充実、一学科であることの意義、マンツーマン方式での学生指導、etc. どれもこれも困難な重い課題であった。しかし、それでも研究室もなく、研究費というものをもらったことなかった私にとっては、総科は有難いところであった。3人の日本史関係教官の予算はドンブリ勘定で使えたので、文学部の国史学教室と重複しないように書物を買ひ、特別予算で高額な図書や資料も買うことができた（もっとも西条キャンパスでは研究室が狭く、その上70%もの図書を



西図書館に移すことが分かってひかえるようにしたが。)。教官集団も教養部時代の教授会規約のごとく“和気藹々”の雰囲気であつちよく、皆実会などでの事務の方がたとの交流も楽しかった。

しかし、学際研究は学生がやるのだ、と言う先生がいたり、学生の就職のためにできれば良い成績を出してほしい、といった発言などには抵抗感があつた。深萱先生が転出されたこともあつて、早々と教授！にしてもらつたが、会議々々で時間をとられるのには閉口した。そして岡本学部長刺殺事件——。その後のことは省略する。ただ先般亡くなられた志邨先生に、総科は壮大なる失敗だ、という意味のことを言つたら、先生は“教養部時代からいる我々にとっては、指導学生を持つただけでもうれしいんだ”と言われて、なるほど、と思つた。かの広大紛争で最も苦勞し、大学改革に最も積極的であつたのは教養部の若手教官団であつた。学部間の格差は解消し、“憩うべきベンチの一つもない（山田浩先生の名言）”現状は西条移転によって解決されるであろう。本来は、統合移転が完了した暁には、広大教官自らが旧来の大学を“解体”し、真に国民の負託に応える総合大学を創造することになっていた筈である。二百数十名の優れたスタッフを擁する総科の教官団のエネルギーに期待されるところは大きい。

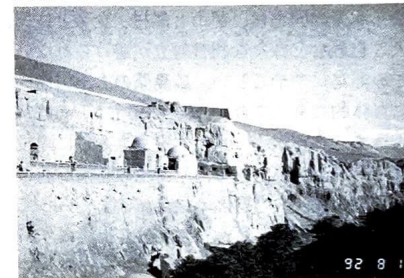
私は、よんどころない事情もあり、16年お世話になった総科を去らねばならなくなつたが、少なくとも総科の“理想”だけは追求し続けたいと思つている。

シルクロードの町・トルファン

塚本 英子（事務官・地域文化コース）

私の本棚に一冊の古いノートがあります。題は「シルクロード」です。高校生時代にシルクロード関係の本を読んで、自分に必要などころや心に残つた文章を書き留めたもので、いつかはシルクロードに行つてみたいとずっと思つていました。それほど興味を持つていたところですが、私にとって現実の中国は長い間神秘的なベールに包まれた別世界のよな気がしてました。

しかし中国が好きならばやっぱり中国語を習わなくては、と始めたのが3年前です。幸運なことに素晴らしい中国語の先生に巡り会うことができ、その方の紹介でこの夏、夢を実現しました。



ベゼクリク千仏洞

8月16日に広島を出発し、その日のうちに上海に到着、18日ウルムチを經由してトルファンに着きました。トルファンの町はシルクロードの天山南路の拠点のオアシスです。7月には気温40度を越えるといわれるこの町も、私たちが着いたときは初秋に入っていました。朝夕は涼しく昼間カラッと暑くて過ごしやすい日々でした。

19日朝9時ホテル出発、鈴なりの葡萄のトンネルをバスで抜けて町の中心地へ出ました。朝の光の中で二、三百人の子供達がいろいろの民族衣装を着て集まっています。「ワーッ。きれい。」あわててカメラをかまえました。バスは急にすごいスピードで走り出しついにシャッターを押さずじまいでした。

後で聞くと、その日はトルファンの「葡萄祭」の初日だったそうです。

バスはすごいスピードのまま、見渡すかぎりの砂漠の中の一本道を走り始めました。行けども行けども風景はほとんど変わりません。砂漠の他には、進行方向に向かって左手に小山が連なっているだけですが、その様はかまぼこを横ならべにしたように低くて赤茶けています。

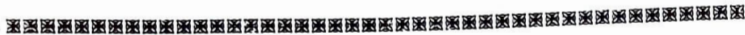
「あの山は火焰山だろうか？」隣の仲間に聞くと、「あんなチャチな山が火焰山であるかい。どう見てもあの山の上で孫悟空が芭蕉扇で焰をあおいだとはおもえんでー。」「でも地図にはこれしかないよ。」ペチャクチャと喋りながら1時間余り着いたのが、火焰山の一角にあるベゼクリク千仏洞です。

澄み切つた大気の中、左手に火焰山のなかのベゼクリクの砂山が見えてきました。有明の月が砂山の左上空にかかっています。こんなにきれいなところがあつていいのだろうか、と思うくらい感激しました。誰かが「平山郁夫の世界だ。」といいましたが、砂の美しさ、空の美しさ、白い月の美しさは、たとえようありません。今もおもいだすたびに心があられるよな気がします。

真正面に遠く雪を頂いた天山山脈が見えました。ベゼクリク千仏洞は、砂山に続く岸壁をいくつか削り貫いて造つてあります。補修を一切していないという洞は、悲しいくらい痛んでいて、何が描いてあるのかよくわからないくらいでした。自然も厳しい所ですし、外国の探検隊に削り取られたり、回教徒に目の部分をえぐられたりしているのです。砂もろく見えませんでした。

この場所を造つた人々も見たであろう素晴らしい自然の風景と、崩れゆく遺跡。この対比のすごさに感動しました。

旅でみた素晴らしい景色は私にとって宝物です。素晴らしい景色を見るために、また旅に出たいと思つています。



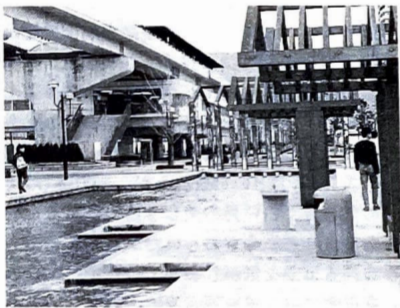
人・河川・愛

—河川環境を考える—

古木 二郎 (生物圏科学研究科博士課程前期1年)

なつかしの大正川 (治水を考える)

あれは20年前、父とよく淀川の支流、大正川へ魚とりに行った。ちょっと曇れば異臭を放ち、真っ黒になるヘドロの川で、タフに私を育ててくれた父に感謝する一方、モロコやカエル、ザリガニなどがいっぱいいて、エキサイトしたのが忘れられない。あの頃より水はきれいになってきているにもかかわらず、最近各地でカエルやメダカがいなくなっているという。温暖化、酸性雨、はたまた天災の前兆と様々な説があるが、一番大きな原因は、カエルやメダカの棲める環境がなくなってきたことだろう。



神戸市・六甲アイランドの人工水路

いろいろな生物が棲むには、いろいろな環境が必要である。本来河川は、水量・水質はもとより、侵食と堆積のプロセス、水際線の微妙な構造により、二つとない環境を創造するところが、拡大する都市を洪水から守るために、直線的な改修がどんどん行われ、河川は無表情になってしまった。最近、親水護岸なるものが増えてきているが、人間の便利さだけを考えたエゴイものは、さらにダムを押し。かの大正川も、いちめん菜の花の咲いてた土

手やひそかに残っていた湿地帯がコンクリートと芝生の遊歩道になってしまった。これからの河川改修は、「都市の安全」と「生物が棲める空間」の両立が求められる。そのためには、洪水を河川に押し込めずに地域的に分散させること、自然のダイナミズムをなくさないことが必要だ。

なんぎな太田川 (利水を考える)

河川の改修は、一級河川は建設省が、二級河川は都道府県が一元的に行っているので、その方向転換は、彼らの腹ひとつでなんとかなるといえばなんとかなる。それに対し、水質・水量の問題は、都市と農村、企業と住民、人と自然など様々な利害対立が避けられないため非常にややこしい。広島県の太田川を例に具体的に考えてみよう。太田川は干満差が大きく、水質がよく水量も豊富、さらに建設省・県・市が協力して河岸緑地の整備が進められており、人と自然の共存がうまくいっているかのようだ。しかしちょっと上流にさかのぼってみると、太田川の利害対立がみえてくる。

現在太田川上流では、湯来町を除く9自治体が過疎指定を受けており、各自治体も川を利用したまちづくりに知恵を絞っている。豊平町では原生自然の残る丁(よろ)川に育てた蛍を放し、蛍バスを出している。また戸河内町は、三段峡へ続く可部線、国道191、186号線沿いに30万本のあじさいを植え、文字どおり行楽に華を添えている。国道191号線は太田川の支流、柴木川と平行して走っているが、川に水はほとんどない。太田川上流の水利権はほとんど電力会社に握られており、その水は山のてっぺんより、ダムからダムへ発電用の導水管を下ってくるので、川に水が流れないのだ。



水のない太田川

つまり、広島市の良質な水は、上流の過疎化の現れであり、その上流では、水がほとんど電力会社に握られ、住民や自然はブーブー言っているのである。

熱いぜ長良川 (全部まとめて考える)

川のことをあれこれ考えている最中、国際河川環境会議の誘いがきた。会議には、自然保護運動の守護神D・ブラウアーやTVAワシントン代表でアメリカ天然資源評議会議長でもあるR・ハーブストが来るというので、10月3日、長良川のおひざもと、長島まで飛んでいった。



国際河川環境会議 (中央はハーブスト氏)

会議のテーマは、「河川政策の転換を求めて」である。水資源開発や河川改修の政策転換、

中央集権との関係等の議論も行われたが、場所が場所、時が時(10月1日に河口堰の最後の本体工事が始まっていた。)ということで、議論の中心は「いかにして大規模開発を阻止したか、あるいはできるのか」であった。各報告者のコメントを挙げると、

●ブラウアー：「持続的発展の議論の中でこれからは“保全”に代わり“回復”が基調となる。」●ハーブスト：「アセスメントの前提は、当事者全員に平等な情報収集および発信の機会が与えられることだ。」「愛だ。河口堰問題には愛で立ち向かえ!」(なんのこっちゃ)●マジョー (NGO代表)：「いくら良い制度があったとしても、住民が参加しなければ機能しない。」●エップレ (スイスの経済学者)：「長期的ビジョンを持って活動をしてください。」

シンポジウム終了後、歩いて河口堰まで行った。もう夕暮れ時でよく見えない。「ようこそ長良川河口堰へ」と書かれた看板が目に入った。う〜ん

日が暮れて、それで艶歌 長良川
二郎心の俳句

確かに河川政策は転換点にきている。これまで河川で儲けてきた電力会社や建設業界、俗にいうハイドロマフィアは、既得権益を誰にも渡さないという訳にはいなくなってきた。都市住民は、山と海を見つめながら水の使い方を再考しなければならない。そして、これからの環境保護運動、住民運動は長期的視野が必要だ。河口堰がここで中止されたとしても、島根の中海の淡水化施設同様、後に残ったコンクリートの塊をどうするかという問題が出てくる。また、このような過ちを繰り返さないシステムの設計も必要だ。

もう真っ暗になった。話も硬くなってしまった。でも最後は結局、やっぱり“愛”かなと思いつつ、やわらぎビートの「おまえをはなさない」を口ずさみながら長島を後にした。

大山巡検を振り返って

中村 友紀 (自然環境研究コース2年)

私たち、自然環境コース03生を中心とした30余名、7月31日から8月4日までの五日間、いわゆる“大山巡検”へと出かけた。

「広島を出発したときから始まる」とされていた実習なのだが、道中に観察したことと言えば・・・思い出せない情けなさ。ただただ、同乗させていただいたH先生と我が故郷についての話で、想像もしなかったほど盛り上がったことしか覚えていない。しかしこのために、後の実習の時にK先生に「君があの中村さんか」と言われ、妙に先生方には顔を売ってしまっていたらしいことが判明。



砂防実習 (二の沢にて)

初日は夕方から本格的実習の開始。気象関係の観測準備の後、路頭のスケッチが行われたのだが、ここで私は、大山巡検における最大のミスを行なった。それは“ブヨ”に足をさされてしまったことだ。このために私は、N先生いわく「女の命」である足を見るも無残に腫れ上がらせ、歩きづらい程度までにしたのである。他にも数名、同じ目にあった者がいたのに、私が最悪だった。<教訓：たとえ山に登らずとも、山のほうへ行くときには、虫よけを！>

二日目、四日目の二日間で、四種類(気象・地質・砂防・植生)の実習が行われた。担当の先生方がそれぞれの実習に適した場所で、熱心に指導・説明をして下さった。中には時間の節約により、うまく私たちが実習をこなせなかったこともあったが、今後の私たちの学習の基本となるだろうと思える事柄ばかり

で、しっかり覚えておきたいと思う。

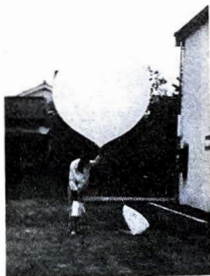
<教訓「グループ毎の実習だから・・・」と、他人任せにしていると、帰ってきてからの課題レポートを書くのに困ってしまうのでご注意ください！>

大山巡検の雰囲気にも慣れてきたころの中日・三日目、いよいよ大山へ登山することとなった。標高は1710.6m。これ以上高い山にも登ったことはあったのだが、およそ合目ごとにデータを取り、記録する、という作業を行いながらの登山の苦しみは、予想以上のものだった。特に前述の“ブヨ”のおかげで、足の曲げづらい私にはなおさらつらいもので、途中で止まっていたと思ったことは数知れず。それでも登れたのは、グループの友人の励ましや、途中、雲の切れ間から望むことのできる弓ヶ浜の景色のお陰だろう。ただゲンキンなもので、頂上で気をよくした私が、下山の時には歌を歌いながら降りる余裕があったことも事実だが・・・。

四日目の夕方、雨の降り始めた中、私たちは大山に別れを告げ、米子へと向かった。



大山頂上から



気象観測用ラジオゾンデ (米子気象観測所)

広島大学総合科学部野外実習I

大山巡検の詩

作詞 横山 圭生 (生物圏科学研究科M2)
作曲 井田 秀行 (生物圏科学研究科M2)
昭和63年作

一ノ節

緑の世界に とけ込んで
見上げる限りの 瞳には
高くそびえる 希望がのぞく
ああ大山 我らの力を試すとき
ああ ああ 大山巡検

二ノ節

広い野原に 響くのは
空と大地と この胸の
熱く脈打つ 弱かな鼓動
ああ大山 我らの心をつなぐとき
ああ ああ 大山巡検

三ノ節

流れる車窓に 浮かぶのは
赤く輝く 友の顔
風は伝える 大きな夢を
ああ大山 我らの思い出づるとき
ああ ああ 大山巡検

ああ ああ 大山巡検
(繰り返し)



(注) この「詩」は横山君、井田君が総合科学部2年生の時に作ったもの。

この夜は、“大山巡検の打ち上げ”と称しての飲み会。ここでは、各先生方の意外な(?)一面を垣間見ることができ、実習における予想外の収穫だった。

最終日は、前夜の睡眠不足による眠い目をこすりながらの気象観測所、海岸での実習。初めて見た気象観測用のゾンデは予想したよりも大きくて驚いたこと、そして海岸では、実習には関係ないが、日本海の荒波に感動したことを覚えている。

これもまた「広島に戻りつくまでが実習である」とされていたのだが、五日間の疲れからか、車ではすっかり眠ってしまい、全く観察していない・・・。

・・・想い浮かんだことをそのまま書いてしまったので、何なのかよくわからない文章になってしまったが、言えることは、いろいろな体験ができて、とても有意義な、楽しい実習だった、ということだ。



やっと登頂! お疲れさまでした。パチリ

南の国から'92

サラワクの熱帯林破壊を考える

平野 裕次 (社会科学コース3年)

最近の地球環境問題に対する関心の高まりの中、熱帯雨林の破壊が話題となっている。今回、私達は熱帯林破壊が急速に進んでいるマレーシアのサラワク州を視察することになった。サラワクで伐採された木材の約8割は輸出され、その約半分が日本に送られている。現在の日本はサラワクの熱帯材に大きく依存している。現地視察をもとにその現状を考えてみたい。尚、この調査は、総合科学部松岡研究室の「熱帯雨林問題の環境経済論的研究」プロジェクトとして計画されたもので、教官1名、大学院生2名そして私の4名の調査団で実施したものである。



調査地域図 (マレーシア・サラワク州)
出所: 『世界』1991年1月号より筆者修正

「ニホンジン」 8月22日(土)

まず私達はマレーシアの首都クアラルンプールにはいることになった。昨夜到着して今日は市内を歩いた。首都の街は活気にあふれており、経済発展の途上にある国の勢いが肌で感じとれた。露店を歩いているといきなり店のおやじに呼び止められ「オイ、ニホンジン、ヤスイヨ!」と言って僕のカバンをひっ

ぱった。「お前、そんな失礼な言い方はないだろう!」と思いながらすぐに手を振り払って次の露店へと向かった。しかし、このとき、僕は日本人なのだとすることを改めて痛感した。街を見回せば、トヨタの自動車、フジカラーの看板、ドラゴンボールの漫画本の海賊版と日本のものがやたらと目につく。外からみると日本というものがもっと違った形で見えてくる。

森を見る 8月25日(火)

ミリから空路マルディに向かう。空の上から、今までブラウン管や写真でしか見たことのないような景色が広がる。一面が緑の樹海である。「これが熱帯雨林か!」と思わず呟いてしまった。しかし、その緑色の中に茶色の線が幾筋も走る。それは伐採道路だった。その光景は、森が伐採道路という菌糸に侵されているように見えた。

マルディからスピードボートに乗ってパラム川をさかのぼる。そのとき読んだ現地の新聞が印象的だった。マレーシアの首相マハティールは環境保護運動をよしとせず、「サラワクを人類学者の博物館にするな」とコメントしていた。環境問題と南北問題の解決の難しさを思った。



熱帯雨林と伐採道路

伐採道路 8月27日(木)

今日は、サラワクの森林伐採で多大な犠牲を強いられているブナン族の村ロングイマンを訪ねた。このあたりの村はロングハウスという長屋風の村に多数の家族が住んでいる。ここで村の酋長の息子ムータンに出会った。彼は木材伐採をやめさせるため林道の封鎖をやったことがあり、今度やったら警察に捕まると言っていた。彼が、村の近くにある伐採道路に案内してくれた。行く途中水溜まりやぬかるみがありそこに蚊が繁殖してマラリアが発生しやすくなったそうである。道路は地中深くえぐられており、地表面の岩が見えている。雨期には伐採道路が川となって土砂が川に流れ込む。そのためここあたりの川の色は茶色である。伐採道路を使って尾根まで登ってみた。そこから眺める景色は肉にもきれいだっ



伐採道路—地中深くえぐられている—
さすがに熱帯だけあってとても蒸し暑く、汗かきの僕にとっては耐えることができず、川で泳ぐことになった。まさかこんな茶色に濁った泥の川で泳ぐことになるとは思ってもみなかった。しかしこの暑さは我慢できなかった。伐採が始まる以前は、川の色はこんなに濁っておらず澄んでいるときもあったという。昔は川で魚がたくさん捕れていたが、最近では濁ったためあまり捕れなくなった。というわけで、泳ぐかわら釣りもやっていたのだが1匹も釣れなかった。あまりに釣れないので、通訳兼ガイドのベンに「向こう岸まで泳いで釣ってもいいか?」と尋ねたら、「とんでもない! 向こうにはワニがいるん

だ!」と言った。「……………」

ロングバナイにて 8月29日(土)

今日はカヤン族のロングバナイという村を訪ねた。今回の視察で3つのロングハウスを訪ねたのだがこの村が一番近代化していた。電気もあり、中学校もあり、小さな店まであった。

今夜はこの村の酋長の家に泊まることになった。夜、お酒を振る舞ってくれたときに伐採のことについていろいろ話してくれた。伐採に対しては政府がそれなりの見返りをしてくれれば容認する立場である。しかし一番問題なのは川が汚れたため魚が捕れなくなり現金収入が少なくなったことである。だから若者は町に出稼ぎに出てお金を家族に送金している。焼畑をしようにも政府の許可は下りない。

私が思ったのは、あまりにも木材伐採と近代化のスピードが早すぎるということである。そのため自然的、社会的対応がつかないか、自然破壊、コミュニティ崩壊をもたらしているのであろう。

以上サラワクの現地の様子はこんな感じであった。熱帯林破壊は環境問題、南北問題、社会問題と様々な側面を内包している。そしてその背後には私達日本人の過剰消費があるということを忘れてはならない。



日本への熱帯木材の流れ (1990年)
出所: 熱帯雨林保護法律家リーグ (JARPLL) 編「使い捨ての熱帯林」公人の友社、1992年

スペイン人が見たバルセロナ・オリンピック

アルフレッド・アンドレス・ラザロ (社会科学研究科博士課程前期1年)



私は、この夏NHKの通訳の一人として母国スペインのオリンピックに参加することができた。テレビ局の取材の側としてその位置で選手に接し競技を追いかけることは私にとってはすごい冒険的な体験であったし文字どおり特別な体験として生忘れられないものになった。

勤勉な日本人はバルセロナでもその通りだったから朝早くから夜遅くまでの準備や取材に忙しかった。ハードスケジュールは他の国の報道スタッフ以上のものだったと思う。

ともあれ、私も競技場に立ち、その目線でオリンピックに参加できたことで“オリンピック精神”を肌でより深く感じ取ることができたと思う。取材スタッフの一員として働けた喜び以上に報道を通してこのオリンピックの精神をテレビを見てくれている人たちとひろく分かち合える!!・・・という実感は素晴らしい喜びであった。

日本に来て秋の景色の赤い美しさや、技と力に感動する相撲で日本を味わい、或いは刺身のおいしさを楽しんだだけでも帰れるけれど、それだけなら日本の文化や日本人の心がわからないままであったと思う。これと同じようにオリンピックに酔い、メダルの数に一喜一憂するだけ、スペインの景色を見てきただけでも「行ってきた」と言える。しかし本当のオリンピックの精神やスペイン人のことを考えつかなかったとしたらとても惜しいことだと思ふ。

私は子供の頃からテレビでオリンピックを見てきたし、スポーツが好きだったからバルセロナ'92に参加して間近に各選手達の努力や各国のチームワークの良さ、素晴らしい技術や新しい記録にはどれも感激してばかりいたけれど、なんと言ってもバルセロナ'92が最大のスポーツイベントであったこと以上に、これが人類普遍の平和の祭...それを立派に象徴した大会であったことに大きな感動を抱くことができた。大きくて強力な国から小さく名前も忘れられそうな国々まで世界中からバルセロナに集まったことは“参加すること

に意義がある”というクーベルタンの言葉を実現させたものであった。世界の隅々から来た183カ国は1万人余りの選手達が平和の集団を形造って、人間の肉体と精神の力を素晴らしい方向に向けることができることを証明し、スポーツが平和のうちにあって花開くことや平和のうちに競い合い結び合って進歩向上してゆく人間のすばらしさ、人類の進むべき道を示してくれたことは“感動”以上のものであった。

元々オリンピックは古代ギリシャの都市国家が互いに兄弟のように仲良く平和のうちに技を競い合うことを目的に生まれたものだが、今日の世界は例えば麻薬の絶滅の問題にしても自然破壊や食糧危機などなど..一つの国、一つの地域を越えて解決に力を合わせなければならぬように、ギリシャ人が願っていた調和を必要としている。(調和は広島でのアジア大会のスローガンでもある：“Asian Harmony”)。私が競技場やバルセロナの街角で抱いたこのすてきな思いはオリンピックが全世界の文化的な発露となり、オリンピックの精神が平和の証となることを改めて広く世界に示したものと思うが、この役割の上で報道が果たしたものはすごく大きいと思う。小さくは、例えばメダルの数だけを追ったり自国の話題の選手ばかり追いかけたり、スペインらしさを強調しようとして、ありのままでない場面を演出したりする報道の姿があったのは残念な点だが、マスコミがオリンピックに参加するのは、オリンピックがスポーツ最大のイベントであること以上に、そこにある相互理解や人間の努力の結集の像を通して人間と人類の平和の未来を伝えるためであると思う。わざわざ技術はもちろん、さまざま取材に払われたNHK・日本の人たちの努力はさすがだったと感心させられもした。

学んだことの大きかったこと、感動いっぱいだったバルセロナ'92に参加させてもらったことに心から感謝している私です。

難問! 総合科学部って、何をするとおところですか?

生谷 武寛 (河合塾、総合科学部卒業生)



「総合科学部って何をするとおところですか?」こうした問いに私は長年悩まされていた。私が総科に入学した頃は(もう十数年前になるが)、総合科学部という名称自体が全国的にも目新しく、あちこちで様々な人からこのような質問を受けた。それに対して私は「何でもできるところです」、「学際的研究をすることです」、「単なる教養部の改組です」など、その場に合わせた何通りもの答え方をしていたように記憶している。そして大学を離れて以降しばらくはこうした質問から解放されていたが、予備校で小論文を教えるようになって、またもや先の質問を浴びせられるようになった。しかも今度は自分の進路決定に関わる問いとして真剣にぶつけられる。彼らは総じてこの問いを前にして真剣に悩んでいるのだと、実感することが多い。

なるほど今日の大学を取り巻く状況は複雑である。やたらと「国際」や「総合」といった名辞を冠した大学や学部が出現し、大学のレジャーランド化などと叫ばれて久しくなつた。大学を取り巻くこうした現状の中で、先のような問いに真剣に悩んでいる生徒達が確実にしかも少なからず存在するという事実を忘れてはならないだろう。

こうした生徒達に対して私は「総合科学を学問名と考えていいの?」や「学際的研究とはどういうことか?」などについて話すことにしている。彼らは大学や出版社からの資料を一通り調べており、中には具体的な学問的関心を抱いている者も多い。そうした意欲ある生き生きとした生徒達と話しながら、私はときどき暗い気分になることがある。もちろん明るい希望的観測をもって総科の理念や目標を語ることはたやすい。だが一方で本当に総科がその目論見どおりの成果を挙げているのかという現実には思いが転じるからである。

鳴り物入りで出発した総合科学部が現在の

ような8コースまで発展したことが、総合科学部の謳う「総合的な研究」の理念に沿った望ましい組織改革であることに異論はない。だがここでいう総合的な研究(学際的研究)とは何か、その実態が問題なのである。端的にいえば、こうした研究態度は学生だけに求められるのか、それとも教官自身がそれを実践するのだからである。教官は従来の伝統的な学問領域に収まる研究を続けながら学際的研究を志す学生を指導するのか、それとも教官自身が学際的研究を実践しながら自らの学問の開示という形で学生を指導するのだからである。もし前者であるなら、「器は用意したから、その中に新しい酒を入れよ」という過大な要求を学生に強いることになる。そしてこの余りにも過大な要求が意欲ある学生を食いつぶすことになるのではないかと、私には思える。そこでは教官さえも「器の飾り」でしかなくなり、〇〇という(学際的)研究をしているあの教官がいる総科に行きたいという生徒もいなくなる。これでは結局、総科の理念に共鳴し入学してきた意欲ある学生がやがて総科の現実の中でその意欲と資質を摩滅させてしまうという、学部としての構造的欠陥になってしまうのではないか。

私事になるが、冒頭の問いを發する生徒に「総合科学部は学際的研究をすることです、実際にそうした研究を続けられている教官がおられるところだよ」と明快に答えたい。これは私だけの勝手な願いなのだろうか。



野心の果てに

中島 美紀(ペンネーム)

闇の中、複数の馬蹄の音が響く。騎上の者たちの心中を反映するかのように、馬は荒々しい息を吐きながら闇の中をひたすら疾走する。それは追われる者たちの懸命の逃避行だった。

月が雲間から姿を現し、山中を駆ける騎馬の一团に柔らかな光を投げかける。

一团は四騎から成っていた。武装したふたりの将軍が一团の前後をかため、中央の二騎を守っていた。中央のふたりのうち右側を駆けるのは、たくましい体軀の若者だった。そして左側に行くのは、老いの兆しをみせながらもいまだ精悍さを失っていない壮年の男だった。

その壮年の男の名は、黄巢。つい半月ほど前までは、唐の都長安において皇帝を称していた。しかし、配下の武将であった朱温の裏切りや唐朝軍の執拗な反撃により、長安を放棄せざるを得なくなってしまったのだ。

長安を取り戻した唐朝軍はすぐに黄巢に対して追撃隊をさしむけた。そのため黄巢たちはしだいに散り散りになっていき、ついには黄巢をふくめた四人となってしまっていた。

そして黄巢たちは今、泰山南東にあるここ狼虎山中までたどりついていた。彼らの目的地は曹州（現在の山東省）であり、そこには黄巢の生まれ故郷があった……。

背後に迫り来る追撃隊を気にしながら、黄巢は手綱をあやつっていた。

しかし突然、目のまへの視界が暗転し、自分の体が宙に浮くのが感じられた。そして意識のすみで、隣を駆けていた若者が叫ぶのが聞こえた。

「父上！」

意識を取り戻した黄巢は、最初に右脚の激痛に気づいた。どうやら落馬したときに脚を折ってしまったらしい。

「父上、お怪我は？」

心配そうにのぞきこむ若者に微笑してみせ

てから、黄巢は自分の馬のほうに目をやった。逃亡の日々のなかですっかり痩せ細った体を横たえ、馬は苦しそうな息づかいをしていた。

「ここまでか……」

黄巢はその姿を見て覚悟を決めた。

「あいつを楽にしてやってくれ」

將軍のひとりが頷くと馬のところにいき、その首に剣をつきたてた。絶命のいななきが響くなか、黄巢は体を起こして若者に向き直った。

「おまえたちは追手が来ないうちに早く行け。わしはここに残る」

突然のことばに若者は絶句した。

「し、しかし……」

黄巢は、動揺する若者から視線をはずすと、傍らに立つふたりの將軍に声をかけた。

「後のことはまかせたぞ。こやつをしっかり守ってやってくれ」

「はっ！ 我らの命に代えまして」

將軍たちは声をふるわせながら黄巢に誓った。

それから黄巢は若者の手を取り、論ずように話し出した。

「……曹州に行けばおまえの母がいる。会って匿ってもらえ。そしていつの日か再起をはかれ、いいな？」

そこまで話してから黄巢は再び激痛におそわれ、顔をゆがめた。

「いいか、それまでは生きる。生きるんだ……」

黄巢は若者の手を放し、將軍たちのほうへと若者を押しやった。

「ゆけ！」

三人が出発するのを見送ったあと、黄巢は右脚の痛みに堪えながら静かに座していた。

ふしぎと死に対する恐怖感はいわてこなかった。これまで戦場で、つねに死と隣合わせに生きてきたからであろう。瞑目していると、脳裏にさまざまな顔が浮かんでくる。

——挙兵以来ともに戦ってきた者たち。

——自分を裏切り唐朝に降った部下の朱温。

——たくましく育った息子の横顔。

——故郷に残してきた妻の笑顔。

「やっぱり私には天下を取ることなんて夢にしかすぎなかったな……。蘭……」

妻の名を呼び、黄巢は剣をのどにそっと押しあてた。

かつては夢と野心を追いつづけていた男を、青く冷たい光をはなつ月だけが、ただ静かに見守っていた……。

——十年前、乾符二（八七五）年、曹州。

「みんな、今日はおれの科挙落第の残念会だ。おおいに飲んでくれ！」

黄巢は笑いながら杯を掲げた。

宴会場に集まった三十人ほどの男たちもいっせいに杯を掲げた。

「お頭、来年はがんばってくださいよ！」

「出しても俺たちを見捨てないでくれよ！」

黄巢は子分たちの励ましの声にいちいち破顔しながら、今夜は気持ち良く酔えそうだと感じていた。

宴会も終わり、黄巢は寝台のうえで横になっていた。酩酊気分でもどろんでいると、妻の黄蘭が寝所に入ってきて黄巢のそばに腰掛けた。

「どうした？ 浮かない顔して」

燭台の明かりだけの薄暗さのなかでも、妻の表情の変化はとらえることができた。

「……このごろ私、あなたが今のままでいいのかとふと考えることがあるの」

黄巢はそのことばを聞いて上半身を起こした。

「そりゃ俺は科挙に落ちてばかりだが……」

黄蘭ははげしく首をふった。

「そんなことじゃないの。そうじゃなくて、あなたはそのまま役人になって一生を送る人じゃないと……」

黄巢は妻の手をとって笑った。

「俺を買ってくれるのはうれしいけどな、俺はそんなたいした男じゃないよ。さあ、今日

は宴会の準備で疲れたろう、もう寝ろ」

黄巢は妻にそう言い聞かせたものの、自分は眠れそうになかった。妻のことばが頭から離れず、完全に眠気と酔いを醒ましてしまったのだ。

「そうだな、俺にだって夢とか野心があったはずだ……」

この夜、黄巢の中で何かが目覚めたようだった。

黄巢は塩の密売商人だった。もともと黄家は塩商だったが、唐朝が塩を専売品として独占したため、密売をはじめたのだ。当然こうした活動は非合法的なものとして取り締まられたが、黄巢たちは武装してこれに対抗していた。

若いころの黄巢は腕っぶしが強く、乱暴者たちの親分だった。また家が富裕だったので科挙のための勉強もおこない、いっばしのインテリでもあった。そうした彼の夢は「偉い官僚になって国を思うままに動かす」ことであった。



黄巢の像

中国歴史博物館蔵

しかし現実足厳しく、中央にコネを持たない黄巢は科挙で落第を繰り返した。一時、荒れた時期もあったが、今の妻黄蘭と結婚し子をもうけると、塩の密売のほうに専念し、若いころの夢はもう諦めかけていた。そうしたなか、自分の気持ちにけじめをつけるためにもういちど科挙を受けた。黄巢はこれで夢を完全に捨てるつもりだったが、妻のことばによって再び心を動かされた。

そしてその夜からしばらくして、黄巢の人生に転機をあたえる事件が起こったのだ。

その年の五月、王仙芝という男が唐朝に対して反乱を起こした。王仙芝は黄巢とおなじく塩の密売人であったが、きびしい密売の取締りに対抗して挙兵したのだ。また、連年の

かんばつやいなごの害による不作のため、多くの農民たちが流民と化しており、彼らもこの反乱に加わった。

「好機到来」。黄巢は王仙芝拳兵の報を聞いたとき、そう感じた。すでに黄巢は官僚として中央で出世することに絶望していた。それが今、リスクもかなりあったが、唐朝を打倒して天下を取るチャンスがやってきたのだ。これには魅力を感じずにはいられなかった。

そして「あなたはそのまま役人になって一生を送る人じゃない……」という妻のことばをも思い出し、黄巢は腹を決めた。夢は野心へと着実に変化しはじめていた。

拳兵の朝。

黄蘭は、武装した一団の先頭で堂々と馬にまたがる夫の姿をまぶしうに見つめた。ついにこの時がやって来たのだ。これからあの人の本当の人生かもしれない。あの人は塩商人や役人なんかで終わる人じゃない……。

しかし、夫が輝きを取り戻した喜びにつつまれながらも、その夫と離れ離れになる一抹のさびしさが黄蘭を襲っていた。

黄巢が黄蘭のほうに馬を寄せてくる。

「家のことはまかせたぞ」

「はい、思う存分あばれてきてください」

黄蘭はさびしさを押し隠し、明るい笑顔でこたえた。それを聞き、黄巢は冗談めかして笑った。

「はっはっは。そうだな、みやげに天下でも取ってくるとするか！」

このときの黄蘭には、それが自分が聞く夫の最後のことばとなるうとは、知る由もなかった……。

王仙芝の呼びかけに呼応して拳兵した黄巢軍は、たちまち数万の大軍にふくれあがった。



黄巢軍の長安入城

中国歴史博物館蔵

反乱軍のうわさを聞きつけた周辺の流民たちが合流してきたのだ。黄巢はこれらの流民を吸収しつつ、各地の唐朝軍を敗っていた。

そうしたなか流民の中から頭角を現す者も出てきた。とくに朱温という若者はめざましい働きをみせ、黄巢軍の中でも重要な武将になっていた。そして彼もまた、天下を取ることを夢見る若者のひとりであった。やがて王仙芝が戦死すると、黄巢は首領として反乱軍をまとめあげ、さらに各地を転戦しながら天下にその名を轟かせていった。

拳兵から四年後の乾符六（八七九）年、黄巢は当時、南海貿易の拠点として栄えていた広州を包囲した。そしてこの豊かな都市を手に入れるため、広州節度使の地位を求めたが、唐朝はこれを拒否した。激怒した黄巢は広州を攻め落とし、再び南方地域を荒らしまわった。

しかし北方出身者の多い黄巢軍は、この地域の風土になじめず、病死する者が続出した。そのため、黄巢は部下のすすめも考慮に入れて、軍を北に向けることにした。

——北還して、以て大事を図らん。

黄巢の目標はもちろん唐の都長安であった。今の黄巢にとって、唐朝を倒して天下を手中におさめることも、もはや夢ではなかった。

廣明元（八八〇）年、長安をなんなく陥落させた黄巢はみずから帝位についた。科挙に落第しつづけた男が、ついに至高の地位を獲得したのだ。

もし黄巢が科挙に合格して官僚になっていたとしたら、今のように皇帝になることなど不可能だったにちがいない。官僚に見切りをつけ反乱に参加した黄巢の選択が、幸運をもたらしたのだ。

「待ってろ、蘭。もうすぐ迎えに行くからな……」

故郷に残してきた妻の喜ぶ様子が目に浮かぶようで、黄巢は笑みを止めることができなかった……。

——ふたたび、狼虎山中。

長安を脱出した黄巢たちに対する追撃隊の指揮は、元黄巢軍の有力な武将であった朱温がとっていた。

朱温が唐朝に降伏したのは、長安奪回を目指す唐朝軍の反撃に苦戦する黄巢を見限ったからだ。いつか天下を取ることを夢見る彼にとって、裏切りなど小さな問題にすぎなかった。

「俺の野心にとって都合の悪い者はすべて敵だ」

朱温はそうわりきると、みずから黄巢追撃隊の指揮をかってでた。すこしでも軍功をあげて、唐朝に対して心証を良くしておく必要があったからだ。

「朱温様、死骸を発見しました！」

その報告を受けた朱温は体が震えた。黄巢か？ それとも別の者か？ はやる心をおさえて朱温は部下の待つ場所に向かった。

山道からすこし外れた林の中にその死骸は横たわっていた。血の海に浮かんで自刎していたのは、間違いなく黄巢だった。かつては反乱軍の首領であり、最後には皇帝にまでなった男の変わり目はた姿だった。

「あなたより俺のほうが天に選ばれたのさ。悪く思わないでくれよ……」

かつては夢と野心のかたまりであった者の死骸を、青く冷たい月の光をあびながら、朱温は静かに見下ろしつづけた。

いま、ひとりの男の野心が果て、その生き血を吸った新しい野心が、静かに胎動を始めていた……。

この作品を書くにあたって、以下の著作を参考にしました。

日比野丈夫

「図説 中国の歴史4 華麗なる隋唐帝国」
講談社1977（図は本書より引用）

陳舜臣 「中国の歴史（四）」 講談社1991

三浦一郎ほか

「世界の戦争・革命・反乱 総解説」
自由国民社1990



終